

森本房子

坂東の野に死す

叢書房

坂東の野に死す

森本房子



崙書房

森本房子

1929年9月、東京生まれ。

主な著書に、世阿弥を描いた長編小説

『幽鬼の舞』がある。

現住所 千葉県野田市岩名2-22-7

坂東の野に死す

一九八八年十月三十日 第一刷

定価 二八〇〇円

著者 森本房子

発行者 白石正義

発行所 崙書房出版株式会社

千葉県流山市流山二一二九六一五
電話 〇四七一(五八)〇〇三五
郵便番号 二七〇〇一

印刷所 金井印刷
製本所 並木製本

※万一落丁乱丁の場合はお取替えいたします

目次

第一部

- 一 何かが起こる……三
- 二 源頼政に見参する……九
- 三 女人を背負う……四
- 四 密謀は発覚した……三
- 五 源氏は立たぬ……五
- 六 勤番を終える……三
- 七 故郷に待っていたもの……九
- 八 柴折しおりの告白……五
- 九 すべては終わった……七
- 十 廃墟の底から……三
- 十一 源頼朝の旗の下に……七
- 十二 関東武士の参向……五

第二部

- 一 最初の勲功……三
- 二 景時という武者……三
- 三 武力ならぬ闘い……三
- 四 河越重頼の娘……六

- 五 一の谷で友を討つ……三〇六
- 六 神崎の遊女小世……三二六
- 七 あわてふためく殿上人……三三〇
- 八 義経に嫁す門出……三三三
- 九 小世との再会……三三六
- 十 鎮西へ攻めこむ……三六六
- 十一 義経と景時の争い……三七七
- 十二 都の奇々怪々……三九六
- 十三 源氏の勝利……四〇六
- 十四 頼朝の勘気に触れる……四一五

第三部

- 一 新しい課題……四三三
- 二 景時、追放される……四三三
- 三 嫡男の元服……四四三
- 四 下河辺の水害……四四九

- 十五 日本無双の弓取り……三三八
- 十六 行平が嫁を迎える……三三三
- 十七 義経追討の群議……三三二
- 十八 政義、罰せられる……三三五
- 十九 大天狗と硬骨の人……三三五
- 二十 異装の者たち……三六四
- 二十一 野にひびくうぶ声……四〇五
- 二十二 盗賊をとらえる……四一六
- 二十三 重忠にかけられた疑い……四二五
- 二十四 頼朝の上洛……四三一

- 五 行時の上洛を許す……四二六
- 六 鎌倉の騒動……四三〇
- 七 頼家が殺された……四三三
- 八 將軍実朝の嫁えらび……四三〇

九	朝雅と重保が口論する……	五三
十	度胆を抜かれた拝謁……	五五
十一	卿二位兼子の野望……	五八
十二	呪詛の噂ひろがる……	五九
十三	都のやぶさめ……	六九

あとがき……

七二

十四	鴨川べりの変死体……	六三
十五	謀叛の噂を立てた者……	六七
十六	行時の書状、陰謀をあばく……	六九
十七	最後のたたかい……	六二

装画・カット 森本房子

第一部



一 何かが起こる

都の春は盛りを過ぎていた。

治承四年（一一八〇）四月。その夜は厚い雲が空を蔽^{おほ}つて、月の影さえ見えなかった。

下京、八条のあたりは、公卿屋敷^{くぎやう}が多く、昼でも蔽^{おほ}めしげな静寂が漂う地域である。ましていまは夜。風流に吹き流す笛の音もなければ、微かな琴の音も聞こえてはこない。

この頃の大宮人は、皆何となく怯^{おび}えている。政変か兵革か、あるいは盗賊の襲撃か、もしくは天変地異か。自分たちの上に、いまにも何かしらの恐ろしい災害が突然振りかかってくるそんな予感。とにかく昔のように、風流に夜を徹し、我が世の春を謳う気持にはなれない昨今の世相なのだ。

去年の秋には、平清盛の命を受けて武装した平家一族が、突如、内裏や院の御所を取り囲み、あるいは公卿屋敷に乱入して、後白河法皇の側近公卿を捕え、有無を言わず解官流罪を断行した。平家の施策に不満な比叡山延暦寺や南都興福寺の僧兵らは、何かという^{みこし}と神輿を担いで大挙都へ押しかける。今夜のような闇夜には必ずのように盗賊が横行する。一昨日は、三条室町の大納言邸が賊に襲われたという。その前には六条烏丸の中務卿の屋敷に火が放たれて賊が押し入った。そんな風だから、目指す女人の許に通う伊達男たちさえ、深夜にならぬ宵のうちに、そそくさと忍んで行って、夜更けともなれば京の町は、死んだようにばったりと人通りが絶えてしまう。闇は、殺氣と妖氣を孕^{はら}んで静まっていた。

八条東洞院の地に、方二町を高い築地塀で囲った広大な八条院御所がある。画然と仕切られて

ひっそりと闇に沈むこの御所の内側に何があるのか、外からは窺い知ることもできない。が、築地の内側には、思いの外、人間臭さが漂っていた。

北の陣に、宿直の侍たちの焚く篝火が赤々と燃えていて、それぞれに特徴ある容貌をした侍たちが、篝火を囲んでいる。諸国から三年間の義務を負って、勤番のために上ってきた者たちだ。北国の者もいれば、南国の者もいた。

ここでは、様々な方言が話され、様々な地方の生活ぶりが語られる。あるいは、洛中で起こるいろいろの事件や噂話に花が咲く。女の話が一番多かった。刃傷事件や盗賊の話、物の怪や百鬼夜行の怖ろしい話もあった。

下河辺行平は、いま御所内を巡回してきたところだ。次の者が立って行ってあいた場所に、どっかと腰を下ろし、人々の話を聞くでもなく、聞かぬでもない様子に黙りこんで、背に負った籠をはずし、二十四本束ねて差した矢を取り出した。腰に挟んだ煮め色の手拭いを取って、矢の一本一本を丹念に磨きにかかる。まるで今晩中にやり遂げなければならぬ重大な任務でもあるかのよう。けれども彼は、特別そのことに心を集中していたわけではない。

「ゆうべの女はな、ご面相はまづいんじやが、歌謡がめっぽう巧い。人それぞれ何かしら取り柄があるものよなあ」

朋輩の尾藤右馬允竜門が、宿直明けだった昨夜のことを話している。

以前、行平は、この尾藤竜門に誘われて、場末の傾城小屋へ遊びに行ったことがある。

「おぬしを鍛えてつかわす。弓と馬だけでは人間あかん。女を知れ。女は人生の門よ」

そんなことを竜門は言って、行平を無理に引っ張って行ったのである。

薄汚れた粗末な小屋の中で、顔だけ真白に塗りこめた遊女の、ほとんど無気味だった印象と、

遊びの後に残った、何となしもの悲しい味気なさを思い出す。だからいまでも朋輩たちが、竜門にからかい半分に浴せる質問や、面白おかしくそれに応えるやりとりを耳にしながら、行平の脳裡には全く別の情景が、切なさをともなうて浮かんではいるのだった。

行平の生まれ育った故郷、下総国しもとうぐく下河辺げがへの地——。広々とはるけく続く田園の彼方には、豊饒な女体が仰臥して、二つの乳房を高く盛りあげたような筑波山が望まれる。整然と仕切られて美しく広がる田んぼ。遠く沼沢を包んで影を落とす森。田野を貫いて豊かに流れる河。そして、どこまでも続く河辺の葦を分けて、一人の若い女の姿が、ぐんぐんと目前に迫ってくる。日の光を映して輝いている頬。はちきれそうにみずみずしい肌。童女めいたいたずらっぽい瞳で、行平を誘いながら笑いかけている顔——。三年前、夫婦めづとになつて僅か二ヵ月を共に過しただけで、故郷に残してこなければならなかった妻柴折しおの姿だ。

——柴折はどうしているだろう——。

胸を締めつけられるような情念に襲われた行平は、それを振り払うように矢を磨く手に力を入れた。

自慢の矢である。若い大鷲はで矧きりいだ矢羽はつやつやと艶があり、黒白の切生きりふが鮮かである。竹の筥はこには黒漆が塗られ、そこに、下総国下河辺莊司行平と、名が明記してある。長さは、普通は十二束そくほどののに、行平のは十五束そくもあるのだ。(束そくとは矢の長さを計る単位。一束は指四本分の巾をいう)戦の庭に立ったとき、これぞと思う敵を射て、功名を敵味方に示すためだ。それだけの自信が行平にはある。いまは亡き父行義ゆずりの弓箭きゆうせんの名手としての自負。まだ一度も実戦の場に出たことはないが、その時が来れば必ず、と思っただけで身内の奮い立つのを覚えるのだった。

この時、行平は、遠くかすかに馬の蹄の音を聞いたように思った。ぶっ騒な噂の飛び交う、あ

やめも分かつたぬこの闇夜に、馬を進めるのは何者か――。

じつと耳を澄ましてみたが、もう聞こえない。空耳だったかもしれない。

「左衛門佐殿が参られたぞ」

一人の男が言った。皆、話しをやめて、その方を見た。北の陣の別当（侍の長官）山部左衛門佐治信が、大股にこちらへやって来る。

「皆の者、今宵は御所に大事な客人が見えらるる。よって全員で巡邏せよ」と、命じた。

「大事な客人とは」

竜門が訊ねる。

「汝らに答える要なし。行け」

別当治信は、侍らを追い立てるように立たせると、一人せかせかと総門の方向へ去った。

実は、このところ少し前から、御所には何となく慌ただしい動きがあるのを、皆、知っていた。数日前のこと。痩せ型の陰気な男が、夜中密かに忍んで来た。その男のことを、事情通の尾藤竜門は、

「あの男は、藏人の髭貞ひげさだといって、後白河院の寵臣だ」

と、行平に囁いた。

平家追討を策したという鹿が谷事件が発覚し、謀議の黒幕は後白河法皇であつたとして、去年の暮に平清盛によって、鳥羽殿に幽閉せしめられた法皇が、厳重な平氏の監視を盗んで、密使を妹宮であるこの御所の主八条院暲子の許に遣わされたらしいのだ。――それにしても髭貞とは珍しい名である。

以後、御所から使いの者が、どこへともなく出かけて行ったり、いままで訪れたこともない客人が訪ねてきたりして、人の出入りが頻繁になっていた。その誰もが、何かしら謂くあり氣にお忍びの様子で訪れ、急いで帰って行く。

後白河法皇の妹宮、八条院暲子は、仏門に入っているとはいえ、その財力、全国に持つ領地の数と広さは、法皇とともに日本一であり、かつては帝位に即くことを期待された程の人。いまでも宮廷に対する隠然とした勢力を持ち続けている。

何かが起こる――。

行平は、予感めいたものを感じていた。

彼は、矢を素早く束ね、えびら箆に差して背に負った。

「総門の方に行ってみようぞ」

竜門もまた、何かを知りたがっている様子。

行平は、傍にいつもつき従っている郎等の前林権四郎と駒馬彦三を巡邏に行かせ、竜門と連れ立って総門の方へ向かった。

この時、夜陰を縫って馬の蹄の音が、かつかつと聞こえてきた。はっきり聞こえる。先刻聞こえたのは空耳ではなかった。御所の総門に近づいてくる。行平と竜門は顔を見合わせた。

複数の馬蹄の音が門前で止まった。何者かが門に近づいて戸をたた敲く。

「山部左衛門佐治信殿おられるか」

別当の名を呼ぶ。

「治信はここに。どなたでおわする」

「源三位げんさんみよりまさ頼政卿」

潜めた声だ。だが、行平には聞こえた。胸のあたりで、どきりと音立てて鳴るものがあつた。「お待ち申しておりました」

治信が、門衛に門を開けさせる。

源三位頼政——。その名前を行平は忘れたことはない。都へ上つてからの三年間というものの、自分の人生に何ごとかのすばらしい希望を齎す、光の源のように胸に描き温めてきた。八条院勤仕のいまは自由がない。それに頼政は三位という高位の人。簡単には会うことのできない身分の差がある。しかし、任果てて帰郷が許されたときには、必ずや一度その人を訪ねよう。そのとき、自分は下河辺行義の嫡男であることを明かそう。そのとき、自分はその人に何らかの光ある前途が開かれることを願ひ出よう。

行平は、おのれの将来を——それは漠然とした夢のようなものではあつたが——源三位頼政の名に結びつけて考えていた。

その人が、いまここに現われるのだ。闇に眼を凝らして、行平は待った。

頼政は、牛車にも乗らず、僅か二名の従者を従えただけで現われた。もうかなりの老齡と思われるが、永く武人として鍛えてきた骨格は逞しく、矍鑠とした気概があたりを払う。

総門の脇にも門衛の焚く篝火は燃えているが、行平の位置からは距離があり、その顔まではっきり見定めることはできなかった。ただ皺深い顔にらんと光る眼だけは、感じとることができた。

この夜更けに、尼宮八条院障子を訪問するとは、いかなる用向きであらう。緊迫する昨今の情勢の中で、確かに何ごとかを予想させるに足る事柄であつた。

もしかしたら、平家追討の密命では——。

第一部

まさか。これ程強力な平家の世に、そのような――。
頼政主従の姿は、中門を入れて内側に消えた。

長々と回らされて外庭との仕切りを画した中門の廊の向側には、魁偉な寝殿造りの檜皮葺の屋根が、夜空に黒々と聳えて見える。あの寝殿の屋根の下で、今宵いたい何があるのだろうか。抑え難い何事かへの期待と、好奇の思いの昂ぶりを感じ、行平は中門の内へ瞳を放って佇んでいた。

二 源頼政に見参する

中門の廊の内側は、重厚な檜皮葺の屋根をいただいた幾棟もの御殿になっている。南殿、東の対屋、西の対屋、北の対屋、東北の対屋、西北の対屋などの棟々を繋いで、瀟洒な高欄の付いた渡廊が続いている。渡廊に囲まれて、それぞれ坪庭があり、欄干の下には、さらさらと清らかな音を立てて遣水が流れている。南殿の南側は、広々とした庭園となっており、自然が風雅に取り入れられている。中央部の池には水鳥が浮び、池畔には四季折々に趣を添える樹木が茂っているのだが、今は墨色の闇に塗り込められて、そよとの葉ゆるぎもない。時折、ぼしゃつと小さな水音がするのは、眠りそびれた水鳥の身じろぎなのか。

薮戸を下ろした寝殿（南殿）からは灯影もほとんど洩れてはこない。広い内部はいくつかの部屋に仕切られていて、中央部のやや奥まったところに、美しい月次の絵を描いた障子（ふすま）を立て回らした部屋がある。部屋の内には更に、練り絹に花鳥を摺った瀟洒な几帳が、床にゆるやかに裾を引いて立てられている。柔らかい垂れ絹を透かして、ほのかな灯影が映し出されてい

るのは、その内側の螺鈿の灯台に灯がともされているからである。

そこには、小さな経机を前に、一人の女人が坐っている。黒い髪を肩のあたりで切り揃えてあるので、仏門に入った女だということが分かる。

きめの細かい美しい肌をして、綾絹の柏を品よく着こなしたこの女が、この御所の主、八条院障子である。

机の上には、紺地の料紙が広げられ、金泥の文字が、一字一字丁寧に綴られている。女院障子は、今日は昼間からずっと、この法華経の書写に打ちこんでいた。しかし、心を籠めて経本の文字を料紙に筆写しようと筆を手にながら、ともすると筆持つ手は動かなくなつて、心はあらゆる方に飛ぶのであつた。

二十四年前のこと。まだ彼女が二十歳の姫宮であつた頃のことかと思ひ浮かんでくる。

時の帝、弟の近衛天皇が、十七歳の若さで悪性眼病をわずらつて崩御すると、その後、誰を御位につかせるかで、父鳥羽上皇は悩まれた。

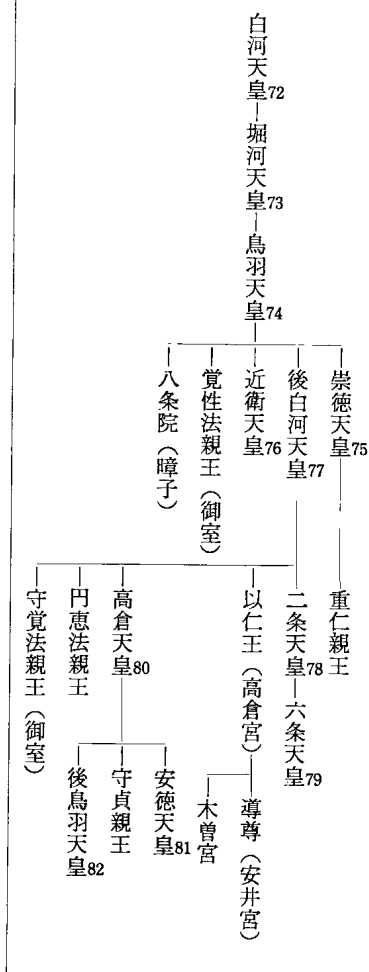
幼い頃から障子は、父鳥羽帝の愛を一身に集めて成長した。それもそのはず、鳥羽帝の第一子は崇徳だが、この人は、鳥羽帝と女御待賢門院との間に生まれたのではなく、待賢門院と、鳥羽帝の祖父白河院との密通によつて生をうけたのだとは、誰一人知らない者のない公然の秘密であつた。鳥羽帝は、崇徳を疎ましく思わない訳がなかつた。

第二子は、生まれながらの盲目で、幼くしてなくなつた。

第三子は、生まれてからずっと起きあがることもできない重い障害をもつ皇子であつた。

第四子は、今の後白河法皇であるが、年少の頃より遊興のみに力を入れて放蕩の限りを尽くしていた。

天皇系図



第五子は、幼少の折に出家して仁和寺に入った覚性法親王である。そして第六子が近衛天皇であった。こういった御子たちの中だったので、ひとときわ優れて美しく生い立ち、幼い頃から目立つ才能を発揮した暲子に愛情が集中したのも当然であった。近衛天皇崩御の後、次の位にこの暲子内親王を、と考えられたのである。けれどその頃の暲子は、感じやすく傷つきやすい、繊細な心をもった姫宮だった。彼女は、宮廷内の、あまりにも凄まじい争い、醜い陰謀や策略を見過ぎてしまった。さきに譲位させられた崇徳上皇と、暲子や近衛帝の母美福門院との間の、呪ったり呪われたりの憎み合い。天皇の周りに何人もの中宮や女御がひしめいているのも厭だったし、待賢門院のような醜聞も堪らなかった。

天皇家の肉親同士の反目に、藤原摂家の親子兄弟の確執が絡まって、三つ巴、四つ巴の争いが